

モノと場所から立ち上がるリアル

―戦争遺跡を歩いて、児童文学を考える―

芹沢 清実

戦争の記憶は、わたしたちの日常生活の、ごく身近な場所にある。それに気づかせるのが戦争遺跡です。

十年以上前、千葉から神奈川にかけて首都圏の海沿いを月一回ほど、「海辺の叙景」と題して友人たちと歩いたことがあります。三浦半島の眺めのよい高台では、家族連れもおとずれるのどかな場所に、草むした丸いコンクリートの台座が残る砲台跡をよく見かけました。

多くは太平洋戦争末期の空襲に対抗するために置かれた高射砲陣地。「本土決戦」を前にして海辺の一角が要塞化していたことを、まざまざと感じさせます。

戦争遺跡めぐりが趣味で、などと言うと軍事オタクと思われるかもしれませんが、本稿では児童文学にかかわる人にとって大いに効能があることを紹介したいと思います。

まず、これまでに書かれた戦争児童文学の読みを深めたり、現代に通じる読みを引き出したりできます。また、実際に歩きまわれば、見たもの考えたことを素材に、新たな

戦争児童文学の構想も浮かぶのではないのでしょうか。

現存するモノを介して戦争のリアルの一端に触れることは、戦争についての想像力を鍛えるトレーニングになると考えています。

高射砲陣地のある風景が語るもの

モノと場所を、その周辺を含めて、じっくり見て背景を考えることから、深みのある作品が生まれる。そう感じさせられた作品のひとつが、野村昇司『砲台に消えた子どもたち』（あすなろ書房、一九七三）です。

海辺の高射砲陣地を扱った長編児童文学で、舞台は鎌倉の由比ヶ浜から南東へ海岸線をたどった小坪（神奈川県逗子市）の洞窟砲台。敗戦の年の秋、物資を拾いに住民が入ったさい起きた爆発事故で、学童十四人が死亡。実在した事件ですが当時は報道されず、地元で聞き取りをしたものを素材に書かれました。死んだ子らと同年代の作者は、自